

## 「拾われた手紙」 1 - (1) 節度・節制

「さちえさん、図書委員会の仕事をわすれたらだめじゃないの。」

ひろ子さんは、強い口調で、こう続けた。

「月曜日は、わたしとさちえさんが当番で仕事をするって、話し合っただけだよ。」

ひろ子さんの言葉は、どこまでもきびしかった。

その日の昼休み、さちえさんは、委員会の仕事を忘れて、友達とドッジボールをしていたのである。さちえさんは、しょんぼりと下を向いているしかなかった。

教室からひろ子さんがいなくなると、さちえさんは、なんだか腹が立ってきた。それで、さちえさんはメモの手紙を書いたのだ。

ひろ子	むかつく	( > 。 < )
-----	------	-----------

さちえさんは、手紙を二つに折って、ひろ子さんのつくえの中に入れて、あわててそうじに向かった。

そうじが終わりさちえさんが教室にもどってくると、ひろ子さんのつくえのそばに、ともき君がいた。ひろ子さんは、まだそうじからもどってきてはいないようだ。

さちえさんが、遠くから様子を見てみると、ともき君は、ひろ子さんのつくえのそばから何やらメモの手紙を拾っていた。

「あっ、わたしの書いた手紙・・・」

「あの時、つくえの中に入れてつもりだったけれど落ちていたんだ・・・」

「たしか あの手紙に、わたしの名前は、書いてはいなかったし・・・。」

さちえさんは、少しだけ胸をなでおろした。

「ともき君は、あの手紙をどうするつもりかしら。」

やはり、さちえさんは、ともき君のことが気になってしょうがなかった。

ともき君からその手紙を取りもどすべきかどうかまよった。

ともき君は、じっと手紙を見つめていた。何かを考えているようだった。

しばらくしてともき君は、何もなかったように、その手紙を小さく、小さく折りたたんで、そっと教室のくずかごのおくに捨てた。

さちえさんは、驚きとともになんだか自分のことが、とても恥ずかしくなってきた。